

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011 年 1 月 25 日

派遣者氏名（専門分野）	小石 かつら（音楽学）
-------------	-------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	F.メンデルスゾーンと近代的演奏会：その成立と変遷の総合的実証研究
-------	-----------------------------------

派遣期間

2010 年 6 月 1 日 ～ 2011 年 1 月 11 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	ドイツ	ライプツィヒ	ライプツィヒ大学附属図書館他 市内各図書館等	Professor Dr. Christian Martin Schmidt
	ドイツ	ベルリン	ベルリン工科大学他ベルリン国 立図書館	Professor Dr. Christian Martin Schmidt
	ドイツ	ライプツィヒ	ライプツィヒ・オペラ	

派遣先で実施した研究内容

市民社会の台頭とともにあらわれた「近代的演奏会（＝入場料収入を前提とし演奏会専用ホールで開催される）」の成立と変遷を検証することで「創造的」と言われる作曲家の創作活動が音楽マーケットと不可分の関係にあることを実証することが派遣者の研究の目的である。この研究は音楽社会史研究という歴史学的手法を用いつつ、作品研究（分析）も同時におこなう画期的な研究モデルであり、派遣先においては、社会史研究としての資料収集・解読と並行して、自筆譜の収集と分析をすすめた。

今回の研究滞在では、以下の3つの点から研究に取り組み、更にこれに付随する現代的問題としてライプツィヒ市における文化政策を調査した。

研究の3つの側面：

1. ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会プログラムの変遷（18世紀末から20世紀初頭）を調査し、その変容を検討する
2. メンデルスゾーンが創出した新しい作品ジャンル「演奏会用序曲」に注目し、作品と音楽マーケットの関係および音楽史に与えた影響をさぐる
3. メンデルスゾーンの未出版ピアノ作品を調査することで当時の出版状況と創作活動の相互関係を裏付ける

付随研究：

現在のライプツィヒ市の文化政策＝ライプツィヒ・オペラ、ゲヴァントハウス管弦楽団、ライプツィヒ市立音楽学校の現状と運営に関する実態調査をおこなった。

さらに、印刷出版都市としてのライプツィヒの歴史（19世紀から第二次大戦頃まで）、東ドイツ時代のオペラ上演とその批評の特性についても調査した。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

1. についてはライプツィヒ市歴史博物館付属図書館に保存されているプログラムをすべてデジタル画像として収集した（利用方法は「OVCプログラム派遣先機関等利用マニュアル」にて報告）。図書館には、演奏会が始まって以来現在までのプログラムが、1枚ずつバラバラ、もしくは年代ごとに綴じられた形で、およその年代ごとにクラフトボックスに収められ保存されていた。本資料は整理中であり年代ごとに正確に整理されていない上、定期演奏会、慈善演奏会、特別演奏会などの分類がなされている時期となされていない時期があるため、帰国後、撮影した画像をプリントアウトした上で整理する（膨大な）作業が残されている。

2. については作曲過程で残された各段階の稿を比較し、そのつど施された改訂について Professor Dr. Christian Martin Schmidt と意見交換をしつつ検討した。これまでの先行研究では整理されていなかった各稿の差異・変遷を整理し、明らかにした。

3. はベルリン国立図書館およびライプツィヒ大学付属図書館に保存されている自筆譜を分析する作業であった。その結果、出版をめざす過程で作品の内容は同じであるのにタイトルを変更する例が多々あることが明らかとなり、また、そのタイトル変更に一定の法則があることもわかり、今後のジャンル研究につなげる所存である。これとは別に、「曲集」として出版する実態も明らかとなった。

現代の文化政策調査としては、ライプツィヒ・オペラにおいて劇場学芸部の仕事の実際を見学実習した。劇場学芸部は日本には無い概念・システムであるが、ドイツでは18世紀以来の歴史を持ち、ドイツ文学、音楽学、演劇学等の博士号を取得した人材が専門職として従事している。仕事内容は教育部門と学芸部門に分かれており、教育部門では小中学生を対象にオペラの内容の事前学習を市内各校および劇場でほぼ毎日開催、劇場見学会（公開練習等）の実施、およびオペラ鑑賞（実質の団体鑑賞会）の実施等を行い、小中学生（と教諭と保護者）教育を担っており、学芸職ではプレミエの準備（演目選定、演出家・指揮者・歌手選定、広報、プログラム執筆、聴衆教育、関連行事の運営等）をすべて担っていた。いずれの部門でも掲げられているのは「聴衆教育」であった。

また、ゲヴァントハウス管弦楽団では運営状況をインタビューした。最後に、市立音楽学校では生徒の受講状況、講師の雇用、オーケストラの運営等に関して取材調査した。

派遣後の研究発表の予定

メンデルスゾーンの（未出版）ピアノ作品に関して、「1825年までの未出版ピアノ作品」を中心に『阪大音楽学報』にて論文発表するほか、「初期習作群」、「生前に作品番号無しで出版された作品」、「1830年代の未出版作品」「1840年代の未出版作品」の4項目に分類し執筆した楽曲分析が *Mendelssohn Interpretation* (Laaber 2011) に、それぞれを独立した章として収録される予定である。さらに、日本音楽学会の全国大会でも発表したいと考えている。

ライプツィヒ市の文化政策に関しては2011年に美学出版より出版が予定されている『ドイツの文化政策』に「ライプツィヒの文化政策」として収録予定。